
外なる者

首藤環

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外なる者

【Nコード】

N4638BA

【作者名】

首藤環

【あらすじ】

人生が嫌になった人嫌いの二ト主人公が宇宙の神達に愛され魔法先生ネギま！の並行世界に移り長生きしながら世界の推移を手を出して楽しむストーリー 銃も出るよ剣も出るよ魔法も出るよ主人公最強でやりたい事をやります。

だいぶ外道かも知れませんが自重なしのこのありさまだよ！！

ネギまのターンまで永いですがご容赦ください。

絶望の味（前書き）

どうも首藤といます。

クトウルフ好きをこじらせてこんな小説を書き出しました

最初は非常に鬱な展開な上展開が遅いです。

そんなんでも構わんよという読者さんを待っています。

罵倒の言葉も悪い点の指摘と一緒にお願いします。

絶望の味

「まじめに仕事してきてその結果がこれか・・・？ もうやっ
られん・・・」
畜生、こんな社会なんてクソくらえだ。

俺は財務省でキャリア組を率いている父親のいる家庭に生まれた。
何不自由ない家庭だったが政府高官という立場にいる父親はエリー
ト意識に凝り固まった人間だったし、もともと建設会社の社長令嬢
だった母親もそれに感化されたのか、この家系は皆がエリートであ
るべきだと思っていた。

俺も子供なりにその考えを受け止め、努力をしてきた。だが、俺は
勉学の才能を持っていなかったようで、良いところが秀才どまりだっ
た。どうしてもほんの一握り存在する天才と呼ばれる人間には勝て
なかった。全国模試でもわずかな綻びが現れ天才には後一段届かな
い。父親にはそれが我慢ならないようで、

「いいか！？ 一位でなければ最下位と同じだ！ 二位以下なん
て価値は無いんだよ！？」
と言われながら殴られ続けた。何カ月も、何年も。そして努力し続
けた。

しかし両親の自尊心と愛を受け止めるのは俺では無く一人の兄だ
った。

俺よりも一段上の存在であろう天才の兄は俺には無いものをいくつ
も持っていた。人望、名声、人に好かれる人間性。そして何よりも
実力が有った。

俺はひたすらにうらやみ、その背中を追いかけた。だが天才にとっ

てただの一段でも凡人にとっては何段にも見えているものだ。当然、凡夫には登れない段もある。だが兄はそれらを軽々と超越していった。俺にはそれ眩しかった。

それから兄に追いつけることもなく時間だけが流れた。

兄は国外の天才たちの集う大学を卒業し帰国した後、外務省にてキャリア組の出世頭を務めているという。その一方で俺は国内では一流と言われている国立の大学を卒業したが、公務員のキャリア組に入る試験に落ちた。両親はそれに落胆し改めて俺に失望した。だがせめてもと父親が大企業とのコネを使って何が何でも就職させようとした。

だが、その行為は俺の中の一線を超えたものだった。

親が何と言おうと自分の為になりそうだから支分の為に全ての時間を費やし、努力を重ねてきた。そう、自分一人で。分かりやすく言えば人生をかけてプレイしていたゲームのデータを勝手にしかも修正不可能ほどに改変されかけたのだ。

22年間の間溜っていたフラストレーションが一度に噴出した。激昂などというぬるいものではない。あまりの怒りに父親を殴り飛ばし啞然とする家族を尻目に、自ら勘当して家を出たのだ。

そうして初めての一人暮らしがボロアパートで始まった。なぜか兄だけはたまに訪ねてきてはなにかしら置いて行った。まあ、困るわけではないからいいんだけどな

生活の為に働かない訳にも行かないので一応企業向けのPCソフトを作っている会社に就職はしたがまさにブラック企業といったやつで月150時間以上の残業上司からの無責任な仕事の依頼など週一回も家に帰れないことも普通だった。給料の支払いが滞る事もあった。

それから2年が過ぎた春の日俺が昼休み中に誰もいない喫煙室である上司がこっそりと話しかけてきた。

「ちょっと良いかい？ 君は非常に優秀だと聞いている。そんな君

にひとつお願いがあるんだが」

何やらきな臭いが自分よりはるかに階級が上の部長だったので無下にするわけにもいかず、

「・・・何でしょうか？」

「あるソフトを君だけで極秘に作ってもらいたい。この事は誰にも言わないで、何に使うかも聞かないでほしいが、社運がかかっている。観ての通りわが社は今不況の中にいるだがそれを作ってもらえれば会社としてかなりの収入が見込めるんだ。逆に作れなければ今でも苦しい給料の支払いがどうなるかわからない」などとその割に楽しむように言ってきた。

とてつもなく胡散臭いがそもそもこんな会社で上司の話を断つたらどうなるかわかったもんじゃない。給料を引き合いに出されるのも苦しいしが。仕方なしに

「お話を詳しく聞かせていただきます」と言うと

「そうか・・・ありがとう。詳しい事はこれに入っているから持って帰ってもいいよ。じゃあまかせたよ」と言って？社外秘？と書かれたファイルをテーブルに置いて立ち去った。畜生、まだ受けるとはいつてねーだろーが。

仕方ないので家に帰ったのちファイルを開くと中には資料とUSBメモリが入っていた。USBには作るソフトの概要と骨組みそしてメッセージが入っていたあまり深く考えても仕方がないと思い、仕事をしながら1カ月ほどで作り持って行きファイルと一緒に部長に引き渡した。

「ありがとうこれでわが社は救われるだろう」と満面の笑みで大げさに言われたがしばらくはなぜか会社では何もなかった。その一週間後に事が起こった。突然、会社のお偉いさんの集まりに呼ばれたと思っただら会議室に連れて行かれた。なんか報酬でももらえたり昇進したりするのかもしれないながら。

入るとすぐに一人に（たしか営業部長の人）自分でこの間作ったソフトを見せられ

夕でも作るうとして俺にやらせたんだろう。だがそれは失敗して問題になった。その責任から逃れるためにあらかじめ俺というスケープゴートを用意していて今尻尾として切り落としたのか・・・

「そう言えば私のデスクから急に無くなっていたんですよねえ」などとうすら笑いを浮かべてやがる。

「彼も出世するために目立ちたかったんだろう」 豚野郎がぬけぬけと叫びやがって。

「まあ君の処分は後日知らせるよ」 どうせクビ以外にねえだる機密ファイル盗んでやばいもの作った事になってんだから。そう思い、その日はそのまま自宅に帰った。

そして冒頭に至る。次の日辞表を提出してきた。その時に部長は「君のように優秀な人が辞めるなんて非常に残念だが、何か事情があるなら仕方無いな」

などとしらじらしくのたまいやがった。そして家に帰り横になって今までの人生を振り返った。生きてきて、強制され、利用され、排除された。

もはや人と深くかかわるのは嫌いになった。一人で居たかった。兄とも会わなくなった。エリートである兄を見ていると劣等感に苛まれるからだ。

だがそんな状態だった俺にはある程度の金が有った。今までの人生には勉強に、仕事に追われて金を使う自分の時間なんてほぼ無かった。

今はまるで無限にあるように感じられた。そうだ、これからは自分の好きな事を探そう。俺はようやく自分の人生を見つける事を始めたのだ。

地下世界（前書き）

説明多し。

地下世界

俺は生まれて初めての遊ぶという行為を心から楽しんだ参考書以外読んだ事のない本を読み、触ったこともなかったゲームを遊ぶ。動かしてこなかった体を鍛えるために武道を習ってみたりした。すべてが新鮮で味わったことのない快感だった。それからしばらくは寝る間も惜しんで遊んでいた。素晴らしく充実していて楽しい時間だった。

そして、最も嬉しかったのが孤独だった事だった。もう誰にも裏切られず、苦しめられずにいるという事実が俺の心を満たしてくれた。

それからの半年はひたすらに楽しみを求め続けた。今までの分を取り戻すように。

しかし、そんな夢のような時間にも終わりが来た。貯めていた金が尽きたのだ。完全に。

今食べる物もないのだ。金がないと生きては行けない。だが、俺にはもう人とかかわり合う事はただの苦痛でしかない。働く？ 仕事をやる？ 全てが他人にかかわっているじゃないか。そんな事なら死んだ方がマシだ。と思った。人間なんて見ていただけで苦しいのだから。武道を人に教わるのも大きな決断だったぐらいだ。

金がないという事は当然家賃も払えず、アパートからも追い出された。もともと体が弱いわけではないが、真冬の屋外に放り出されっぱなしで体を温める術もないとなると当然風邪をひいてしまった。

「いつそ、自分で幕を下ろすか・・・」

このまま生き延びられるはずも無いと思い最後の金と荷造り用の紐を持ち富士樹海へと向かおうと思う。

電車やバスに揺られながら楽しかった時間を思い出す。頭が痛い。だが、ぼんやりした頭で記憶をたどっていた。次第に悪くなっていく体調は気にならなかった。やはり、ただの風邪ではなかったようで、はや視界がおかしい。明滅している。だが、もうどうでもいい。樹海の端に着いた時には木やバスの輪郭があやふやに見えてきた程に悪化していた。それでも死ぬぐらいはできると思い、樹海に足を踏み入れた。

首を吊るのに最適な場所を探して歩き続ける。偶にここに眠る先達とご対面したりもあつたが、鼻歌交じり上機嫌だった。頭の中は楽しかった事でいっぱいだったから。

しばらく歩きまわっていると、紐がブラ下げやすそうかつ首も吊りやすそうな高さの見事に九〇度に曲がった木を発見した。さつきから足もとも分からないほどに頭痛がひどいのでここにしようとなんか決めた。

曇天の森の中、首を吊る前に人生最期の体操をして、顔を拭く。そして死ぬ為に前を見る。

するとその視界の隅におかしなものが居た。黒い女。

細かいところは分からない。だが、ここに来てなぜかあの女に近づきたいと強く思ったのだ。

その瞬間俺は、女が居た事にも驚いたが、何よりも人に関わりたかと思つた自分に驚いていた。だが人嫌いな自分がそう思つたのなら、それに従つてみようと思つた頭の中で答えを出した。

「あんたは一体誰なんだ？」

静かに問いかけるだが無音の森には良く響いた。すると反応を示す

わけでもなく、後ろを向きゆつくりと歩き出した。

俺はそれを見失わないように慌てて追いかける。

引っかけた縄もそのままに、その女に近づいてみる。だが、女にいくら近寄っても距離が縮まらない。俺は焦っているわけではなかった。ただ強く願っていた。話してみたいと。

歩き続けるうちに女は真暗な洞窟に入った。俺もそれに続く。下に伸びるスロープのような洞窟の天井は低くようやく通れる程度だった。そしてひどく臭う。まるで死んだ魚の上を歩いているようだった。

女は何処までも降りて行った。俺もそれを追い潜りつづけた。もうどれだけ歩いたか分からない洞窟に入る時ライターで作った即席の松明ももうはるか前に消えている。

真つ暗な中で響くペタペタという素足の女の足音を頼りにして歩くだけだった。

恐ろしく永い時が経ち、自分でも正気を疑い出した時、突然に前を歩く女の足音が止まった。見れば、前方にはぼんやりと明るい平坦な遺跡のような通路が見えたそこまで行くと長い通路である事が分かった。

先に行くほどに明るくなっている。女の姿は見えないが

明りに包まれたことで俺には心の余裕が生まれた。お席の壁に彫っ
ていてある彫刻が目には止まった。

「何だこりゃ？ 頭がトカゲみたいなのが普通の人間の上にいる
？」

そしてさらに先に行く

「今度はトカゲ人間が触手付き巨大アンモナイトとこれまたでかい
タコを祀ってる？ おいおい、ハハ・・・こりゃ何処の宗教の仕業
だよ？」思わず寒い笑いが出ってしまった。

だがその次に壁に彫られていたものを見て俺は少し驚いた。

「おい、冗談だろ？ ここ本当にどこだよ地球だよなあ？」

そのトカゲ人間たちが普通の人間を食べている姿だった。だが今の

俺には死ぬ事をはじめとするリスクが最初から前提でここに来たので「まあ喰われるって落ちも一つあるな」で済んでいた。

その先には空に浮いた輪に向かうトカゲ人間の靈魂のようなものが彫られていたが、壁を見ることに飽きた俺の興味は女の方に戻っていたので正直どうでもよかった。

「まったく、女はどこに行っちゃったんだよ」

とひとり愚痴りながら通路を進んで行くと非常に大きな空間に出た。薄暗いため空間の端も天井もはまるで見えそうにないが進むしかないのとおりあえず突っ切ってみようと考えたただ歩く歩く。

この遺跡に出てからなぜか頭痛は消え体調はこの上なく良かった。おかげで鍛えておいた体が機能を果たしてくれている。とりあえずはありがたかった。

リラックスしながら歩いていると薄闇の中から高さ20mはあるだろう巨大な祭壇が突然姿を現した。

「うおーでっかいなー」人の心理としてこういった大きな物体を見ると無性に

「登ってみるか・・・」

登りたくなる。昔の登山家もそこに山が有るから登ると言っているし。

「よっこいしょ」若干おっさん臭い言葉を言いながら石の階段を登っていく。

「ふゝ歩き通しだったし疲れたな・・・で、何が有るのかなー」と

「短剣と古い本か・・・チツ、いらねーw剣はキモイ肉塊みたいなのに刺さってるし本は人の顔みたいな表紙だし」

祭壇の上も物色し終わったと思った瞬間すぐ後ろから

「勿体ない事しなさんな。そんなでお前さん良くここまで来れたな」と女の声に話しかけられ驚いて振り返った。

地下世界（後書き）

やっとレギュラー登場

次話から主人公の名前も出てきます

無貌の夜天

「ようやく現れたか。あんたを追いかけてここまで来たんだぞ？」

「

振り返るとそこには追い求めていた女が佇んでいた。その肌はまるで昔に山で見た冬の夜空の様に澄んだ黒。そして、その顔はこれまで見たどの女よりも美しくそして好意が持てた。

「それは光栄な事だがお前にとってこの出会いは不幸なものだと思うが？」

「そんなことは無いさ。死ぬ前に面白いものが見れた。初めて女性に興味を持てた。あんたのおかげだよ美人さん」

「フフハハハツ……この私に対して外見の事を言うとは。こうして人と面と向かうなんてアルハザード以来じゃないかな？ お前のような存在は本当に久しい」

「何がおかしいんだ？ それに俺には魁坂 九郎って名が有るお前つてのは止めてくれ。それであんたは？」

「それで、とは？」「ニヤニヤ笑う女。

「礼儀とか言うつもりはないがこっちが言ったんだからあんたもそれに応じるつてのが会話つて奴だろう？」

「確かに一理ある」

「なら答えてくれあんたは一体何者なんだよ」

「そうだね・・・私の名はこの言葉でいえばニヤルラトホテプ。
千変にして無貌の神さ」

「・・・・・・・・・・」

「おや？ カイサカ、君は「九郎で良い」

「ふむ失礼、クロウは私をいや自分を神という者を信じるのか？
驚きだな。今まででは初めてのタイプの人間だ。大抵どこでも狂人
扱いされてきたのに」

「別にあんたを「ニヤルで良いよ」

「・・・別段、ニヤルを信じてる訳じゃあない。ニヤルに心を惹か
れた自分を信じたままだよ。最期の感情の結末が気になったただそ
れだけだ」

「ふうむ、道理で精神が強いわけだ自分をそこまで信じられるなん
てな。昨今は自分を神と言いきれるものも減っているというのに
素晴らしいな。君にとっても興味が湧いた」

「そりやどうも。でここはどこなんだ？ あの世か？」

「残念ながらクロウはまだ生きてるよ。ここは遙かな時の向こう君
たち人類の始祖が現れるよりも前の時代に地球を支配していたもの
の街そして太古の神が眠る封印の祠さ」

「へえ、ニヤル以外にも神はいるのか。ていうかここに眠るってど

ういう事だ？」

「どういうもこういうもほらそこにいるじゃないか」そう言つとニヤルは元来た道とは反対の側を指した。

釣られてそつちを見るとそこにはとてつもなく広大な穴が開いていた。もはや穴なんてものじゃ無く縁の丸みが知覚できないほど巨大なので断崖と呼ぶべきだろう。

「え？ これ？」俺も穴を指す

「封印ねえ・・・そいつは大層なことで。何をしてだい？ まさか神々たるもの理由もなしにじゃ無いだろうし」

「そつだね・・・分かりやすく言えばその昔に起きた神達の戦争の敗者の陣営に居たんだよ」

「で、封じられたと？」

「その通り。でもまあその力が少しでも漏れたりしたらここは大変なことになってしまうしな」

お手上げというジェスチャーをするニヤル。

「それは大変だ。正に邪神じゃないか地球が滅ぼされてしまつう」

棒読みでそれに合いの手を入れる。お約束だからな。

「おいおい、どうでも良いって顔に出ているよクロウ。君はこの惑星の住人だろう？」

「なんだか職業病みたいなものっぽいな。神様も大変だな」

「いや本当に世知辛い時代になったもんだ」

まるで中間管理職のおっさんのような言葉を吐くニヤルには同情が禁じ得なかった。

「しかし、そんな曰く付きな祠の祭壇なのに特に良さげな物は何も無かったな。それが少し残念だ」

そう呟きかぶりを振ると

「クロウ、君は何を言っているんだ？ 人にも身には過ぎるほどの物がそこにあるじゃないか」

ニヤルは不思議そうに言いながらかたわらの石の台の方をを右手人差し指で指した。

「このボロい本と短剣に価値なんてあるのかニヤル？ まあ、神であるお前が言うなら・・・どら、よく見てみるか」

短剣を肉塊から引いてみる。するとまるで抵抗を感じないほどあっさりと抜けた。

「え！？」

おい抜けちまったぞニヤル。しかもあの頭痛が少し戻ってきたし、なんなんだよ。これは!???

「があああああああああ何これ！？ 何だよこれ！！？」

しかも意識が非常にゆっくりと塗り潰されていく。体がいうことを利かない。剣を離すことが出来ない。脳髓でヤバイヤバイとアラートが鳴りっぱなしで体中から汗が吹き出る。

「ニヤルツ！何だよこの剣は！？体が動かせないし離すことも出来ないぞ！もしかしなくとも呪いの武器つてやつじゃないのか？おい！？」

気のせいかな地響きまで感じる。

「クロウ君は一体何者なんだね？ その剣を持ってもなぜ大丈夫なんだい？」

どこが大丈夫なんだ正に今呪われてるだろうが！

「待て、何の事をいつてるのかわからないぞニヤル、分かる様になんて言ってくれ！」

「そうだね・・・、始めにその剣の名は邪聖剣ネクロマンサー。邪と聖が同居する究極の神剣だ。そして、それを創ったのが万物の王にして我が主、魔空王アザトース様だ。もっとも今は奪われて所有権は無いのだがな」

魔空王アザトースだ？スケールがでかすぎるっの

「そんなことより俺の体を何とかしてくれよニヤルなら出来るだろ！？」

「そんなことって・・・まあいいよ。それで、君はどうして欲しい？」

「どうしても何も見たまま困ってるのが分かるだろう！ この呪いを何とかしてくれ体が動かないし意識も奪われつつあるんだって！」

「・・・そうかい、分かった」

ニヤルはそう呟いて俺の傍らにある石の台をに鎮座されているあのボロい本を拾い上げて開き

「！」

と俺には知覚出来ない発音で呪文を唱えた。すると途端に体を操られていたような負荷が消え、意識を冒していたものも無くなった。

助かったらしい俺は呪いの解けたらしい短剣を台に置き

「助けてもらったなありがとうニヤルラトホテプ」
「とりあえずお礼を言っておく。」

「礼には及ばんよクロウ。生きていて何よりだ」

「さて、このネクロマンサーだがなんでそんな凄まじいものがこんなところにあるんだ？」

「あーそれはだな、さっきも言ったがこの剣は究極の聖と邪が備わ

っている」

「ちょっと待った」

「どうした？ クロウ？」

「そもそも聖と邪では互いにその力を打ち消しあうんじゃないの？」

「そうか、クロウは知らないもんな。じゃあクロウ、まずは神々の話をしようか」

思いついたように吹きニャルは古代の話 시작했다。

無貌の夜天（後書き）

一文ごとに行を開けて見やすくしてみました

いやーニヤルさんのセリフを書いているのが楽しいです。

クトゥルフ系のキャラで出したら楽しくなりそうな奴随時募集中です。

神々の大戦

「そうか、クロウは知らないもんな。じゃあクロウ、まずは神々の話をしようか」

その昔、宇宙は一つの意味を持ったもやのようなものだった。それがある時一部がちぎれ二つに別れた。それがさつきも話した魔王アザトース、残った大きい方が旧神と呼ばれる存在になった。

しばらくすると宇宙には銀河が生まれ人類以前にも多くの生命が誕生した。

混沌と破壊を旨とするアザトースは力を求め、それらの生命の支配を考え自分の手足である四神を始め多くの強大な神を創り出した。その多くが絶望的な破壊の力を持っていた。

しかし均衡と安寧を求める旧神はそれを善しとしなかった。その結果全ての邪神と旧神達の大戦争が始まった。

始めは数で優位に立っていた邪神達だったが、旧神達はその筆頭であるノーデンスを中心に邪神を次々と宇宙の彼方へ吹き飛ばし、惑星に封印していくうちに数を減らした。その状況を打破する為の対神兵器としてアザトースによって作られたのが邪剣ネクロマンサーだった。

その究極の対旧神兵器によって戦況は膠着した。

だが旧神達もそれに対抗するためにノーデンスの手によって
聖剣ネクロマンサーが作られた。

その出現によって戦争は旧神に傾いき旧神側の勝利に終わった。

多くの邪神を封印または放逐する事ができ、破壊と混沌の体現者
だったアザトースからも知性を奪い夢幻の彼方へ追いやることに成
功した。

しかし旧神側にも被害は多く、ノーデンス以外の旧神達の大部分が
消え去った。

だが、ノーデンス自身もその力の多くを失っていた
そこで、二つのネクロマンサーを仮の姿では有るが一つの剣にした。
その強大な剣の力を生かすべく、アザトースの産み出した邪神中で
も特に封印に苦闘した
ガタノトーアの結界に邪聖剣となったネクロマンサーを使った。

その後旧神達はカダスと呼ばれる未知なる次元に去ったという・・・
。

「どうもお粗末様でした」

「どうもお疲れ様でした」パチパチ

「この剣の由来が分かってもらえたかい？」

「なるほど完全混じりあってに一つの剣になっているのではないから・・・ね。あ、それとも一つ質問が」

「なんだい？ 何にでも答えてあげるよ、クロウになら」

「さつき、ネクロマンサーで封印したって言っていたけど、このことだよなあ？」

そういつて台に置いてある短剣を指した。さつきから地響きで揺れ続けている。

「そうだよ。それがどうかしたかい？」

当然といった態度でそう言い返すニヤル。

「いやいや、封印は大丈夫なのか？ もしかして俺は楔を抜くような真似をしでかしたんじゃないのか？ 旧神ですらてこずったガタノトーアを目覚めさせてしまったらどうしようか。

別に誰が死のうが構わないが、地球滅亡の引き金を引くのはやりたくない。後味が悪いだろう？」

「ハハハハ、相変わらず君は愉快なやつだなクロウ。死んだ後味が悪いだなんて。でも完全に目覚めることはないと思うよ。力を失ったとはいえあの旧神の封印もある事だし」

「じゃあ、この揺れはその、寝惚けて寝返りでも打ってるだけかなんか心配して損した。」

「さつきクロウが操られかけたが常人だったらここまで来ることも

出来ず狂死していただろうし 過去にガタノトーアの封印が緩んだ
時に英雄と呼ばれるものがここに二人現れたが

片方は剣に操られ正気を失った。もう一人がその者を斬りガタノ
トーアを再封印したが、その男はついに邪聖剣を装備することが出来
無かった。

だが、クロウ、君は邪聖剣をしばらく握っていたが心身の主導権を
奪われなかった。

この邪聖剣にはガタノトーアの旧神への悪意が詰まっているのだ。
つまり、短時間とはいえ、君は大なる邪神の憎悪に抗ったのだよ
！ 定命の身で！

ニヤルはやたらと興奮した様子で熱く語っているがなにぶん人間な
もので神の物差しが分からない

「それって凄いことなのか？」
と聞いてみた所

「そうだね、人として生きてきたクロウにはこの尺度が分かるはず
も無かった。ごめんね、配慮が足りなかったよ。それを人間の身近
なものに例えるならそうだな・・・

チエスのルールを理解し世界チャンピオンと互角以上に闘えている
猿といえれば分かってもらえるかなクロウ？」

「言いたいことは、その、凄いつてことは理解した」

俺を猿扱いしているようにも聞こえるがニヤルもまた神なので感覚
が違いすぎる故仕方ないかと自分に言い納得させる

「でも、この剣の神様が使っていたにしては小さくないか？」

「溜まっていた怨念も私が消したし、今なら君も問題なく持てるだろう。ほら、クロウ、ネクロマンサーを構えてよ。それで答えが出る」

そう促されて両手で柄を握る

「そしたら、何か剣に違う形の思いを籠めるんだクロウ」

ニヤルがそう言うなら・・・やってみるか。何を想像するか・・・日本人だし、ま、日本刀日本刀つと

そうイメージした瞬間に握っていたネクロマンサーがいわゆる太刀と分類される70？ほどの大きさに変わり柄がそれに合わせて太くなったのを感じた。

「おおー・・・便利なもんだなこの剣。流石、神の剣だけあるな・・・」

「その割にあんまり驚いてないようだが」

となぜか少し悔しそうなニヤル。

「いやさ、全宇宙クラスの戦争とか聞かされた後じゃこの剣一本、いや二本か、でできる事なんてたかが知れてる気がするし・・・」

「私から見たらその剣はとてつもなく恐ろしいよ。まさに神殺しの剣だからね。頼むからこっちにそれを向けないでくれよ？ それに神がその剣を持つからこそ凄まじい力を発揮できるのもあるだろう」

「要するに俺の力不足って事ね・・・八八八・・・」

「しかし悲観することは無いよクロウ。君は選ばれたんだこの邪聖剣に。今まで私は永い間この剣を見てきた。だが、この剣を持てる者は神を含め誰一人として居なかった。

ガタノトーアの憎悪に耐えたであろう強靱な心の持ち主は、いたが持てたものは誰一人いなかった」

「何で？ 俺はあっさり持てたけど？」

「心が聖か邪のどちらかにわずかでも傾いていたら邪聖剣の力で滅ぼされるからだよ。心の強いものほどどちらかに大きく傾いていたから触れた瞬間に皆その存在を浄化はたまた汚染され消えていった。思えばこんな強大な力が二度と振るわれる事のないようにというのがノーデンスの考えなんだろう。さて、以上から言えばなぜ君がこの剣を平然と持っているのかその答えは一つ」

「俺が完全な中立の存在って事か？」

「ああ、少なくとも神々の中でいえば中立だろうでなければ持てるはずがない。つまり宇宙誕生からみて君が恐らく最初の邪聖剣の適格者だな。ここでクロウと出会い、助けるのも私の定めだったんだろう」

まあ、ニヤルみたいな美人に運命だの何だのと言われれば悪い気はしないけどそんな唐突に運命とか言われてもな……。

魔空王の胤

「私はクロウに会うために邪神たる運命に導かれてここにきたのかもしれないな」

「ニヤルみたいに綺麗な女性にそんな事を言われたらまともな男なら大喜びするだろうな」

俺自身これが惚れるという感情だとは思わないが、かなり心を惹かれているのも事実だからな。

「普通、会ってすぐの女性に綺麗、だとか、美人だとかはナンパの手口だぞまったく。それに無貌の私にとって外見などはどうでもいいことなんだが、悪い気はしないとだけ言っておこうか」

無貌、またその言葉か。

「なあ、ニヤル。」

「何だい、クロウ？」

「さつきからお前が言ってる無貌とか千変って何の事なんだ？」

「?・・・ああ！　またしてもすまないクロウ！　あれじゃ君にとつては自己紹介たりえなかったね」

「いや、俺の知識が足りないって事もあるんだ。ニヤルが悪いわけじゃねえよ」

でも、机でするだけが勉強じゃないってことがよくわかったし、よしとするか……。

「ああ！ クロウはなんで私にそんなにも優しくしてしまうんだ！？ お願いだから、君という存在に私をこれ以上嵌まらせないでくれ！」

なんかもっと状況が悪くなった気がする。どうしたんだ、こいつ？
しかも結局答えを聞けなかったし……。

そう思った。瞬間に事は起きた。

先ほどから小さな揺れは続いていた。

だがいま、石の台に転がっている短剣の振れ幅が大きくなってきている。

揺れがだんだん大きくなってないか？

それに気がついたとき、俺は一つの事実を思い出し少しの不安を覚えた。こいつなら何か知ってるだろうと踏んでチラリとニヤルを見ている。そしたら案の定、

「意外と早かったな」

などごくごく僅かな驚きを顔に浮かべて口走って居やがる。

「おいニヤル、この揺れって封印されてるって言う神様が原因か？」

「うん、そうだよ。この分だともうすぐ封印が解けるんじゃないかな？」

「？ さっきは大丈夫だって言ってたか？」

「ここまで旧神の力が落ちてるとは思わなかったしな。封印の大部分をネクロマンサーに頼ってたのだろうね」

ニヤニヤと笑いを浮かべながらしらじらしい事を言うニヤル。

「そう言えば邪神の封印が解けるとどうなるんだ？ 聞いてなかったな」

「そうだね、戦争のときにはガタノトーアの姿を見た神々以外のものはあまりの恐怖に意識が有るまま石化して死ぬ事も出来ずに朽ちるにまかされてたけど。ま、物理的な破壊も凄まじいよ」

「げえ、死なせてくれないのかよ……。死ぬ気でいたのにそれはおれからすりゃまさに最悪だぜ。まあ、俺以外でも嫌か。」

「そうこうしているうちに振動どころかかなりの揺れになってきた。地震の多い国で生きてきても未体験な強さだ。」

「詳しくは分からないが震度でいえば五から六にも相当するだろう。」

「俺はもう立っていらねずに石の台に寄りかかっているがなぜかニヤ」

ルはまるで地震なんか無いかのように立っている。さらに不思議な事にニヤルは揺れていない。どういう原理かは知らないが神様の力って奴だろう。

「いやーガタノトーアはかなり怒り狂ってるみたいだね。ほら、おいでよこちらに。この奈落の底から来る狂気がよくわかるよ」

そう言つてニヤルは手を差し出し地面に座っている俺を立たせ、断崖のある側の縁と導く。差し出されたその手は柔らかく、力強く無限の力を内包しているようでもあった。そして、何年もふれあい続けてきたかのようにまるで違和感を感じなかった。

祭壇の端から頭を出し、奈落を覗き込む。下の方は完全に暗くなっているのでガタノトーアとやらの姿は幸か不幸か見えなかったがただ恐ろしい存在感が感じられた。

「でも、やっぱり俺はガタノトーアが怒るのも当然だと思ふな・・・確かに危険な存在だろうし敵対者が封印するのは当然だろう。でも、封じられたものの存在とか思考が変わるわけではないだろう？ そりゃあね、封じられていた分だけ怒りも増すつものだろう」

別に良い悪いで判断するつもりは毛頭ない。俺も閉じとめられたら閉じ込めた奴に復讐を考えるだろうし。それは邪神とて同じだろうに。旧神とやらは邪神の正反対の存在だし人間にとつてはただの恐怖でしかない。だからこそ封じるの一手に尽くしてきた。

それゆえ、邪神であつても可哀想に思えて仕方がない。例え善人であつても閉じ込められたら負の感情が湧くだろう。聖人サマはどうだかしらんが。

しかし、降りかかる火の粉は払わなければいけないとも思う。苦し
いのは嫌だからな。

「ニヤル？俺は今この剣をどの程度使いこなせるんだ？」

あいにく剣はおろか刃物は包丁以外に持ったことがない。旧神が手
擦ったとまで言われている邪神に勝てるわけもないが、こちらには
邪聖剣が有る。少しは抗ってみるかと思いい、ほんの少し覚悟を決め
振り向きニヤルに話しかける。

しかし、そこに漆黒の肌をした女は居なかった。

「？ おいニヤル！ 何処にいるんだ？」

突然姿を消した神を探す。だが見当たらない。薄暗い空間が更に暗
くなったように思える。

「まったく、どうすりゃいいんだもうすぐガタノトーアが目覚める
だと？ 俺には選択肢が今自殺するかガタノトーアに半殺しにされ
て生き続けるかの二つしか無いじゃん……」

そうぼやくと唐突に広大な空間の全方向から

「君は今死ぬ必要も石になる事もないよクロウ」

と心に直接響くような声が聞こえてきた。

「ニヤル！？ どこにいるんだ？」

揺れはもう寄りかかっても立っていられないほどで俺は冷たい石組

の上に這いつくばっている。ガタノトーアの復活もそう遠くないだろう。

「クロウ、君は死なせはしないよ。私はとても君のことを気に入ってしまったんだ。死なせるなんてもつたいない事はしない」

こちらに応じる事のないニヤルの言葉が心に響く。

「答えるニヤル！ どこにいる！！」

ただ淡々としかどこか楽しげに、ニヤルが続ける。

「そう言えばさっきの私は何者かって問いにまだ答えていなかったね」

「こんな時に何を言ってるんだニヤル！？」

「わたしはアザトースが最初に生み出した四柱の邪神の一人、宇宙の影、無限の存在を持つ邪神ニヤルラトホテプ」

「邪神は全て封印されたんじゃないのか！？」

確かにこいつは自身を旧神とは一言も言っていない。だが、まさかそこまでのものとは思ってもよらなかった。

「私は影、物理的なものでもあり、偶像的でもある。そんな、この宇宙のどこにでも存在するものは流石に旧神でも捕まえ切れるものじゃないよ。そして 影ゆえに決まった形も無い私だ。見つける方法も無い」

先ほど俺が容姿を褒めたがあれはあんまり意味が無かつたんだな・
・などと呆けているとニヤルの存在感が断崖を降りてゆく。

「おい？ どうするつもりなんだ？」

「交渉してみるのさ」

「ブチ切れた邪神に交渉なんてできるのか？」

「同じ邪神の私なら大丈夫だよ。それに、君もいるじゃないか？
じゃあちよっと思って行くから待っててくれ」

そう言うとニヤルの気配は奈落を降りていった。

。 戦闘は話にならないとニヤルが言ったくせに頼りにするなよ……。

魔空王の胤（後書き）

ガタノトーアの始末どうしようか・・・

感想・諫言・罵倒・言葉攻めを待っております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4638ba/>

外なる者

2012年1月14日13時47分発行